

## 近世吉原遊廓の終焉

### 一名を明かす遊女たち「吉原細見」の分析から―

中央大学大学院文学研究科日本史学専攻

博士前期課程1年

22O2101004B 倉金宙本

## 目次

はじめに

1. 近世遊廓の研究史―その視角と課題―
2. 調査の概要と西尾市岩瀬文庫に就て
3. 幕末の吉原と「吉原細見」に就て
4. 近世吉原遊廓の終焉―一名を明かす遊女たち―

おわりに

## はじめに

筆者は卒業論文「近世遊廓としての吉原の実態と終焉―「吉原細見」の検討を中心に―」において、副題に付けた通り「吉原細見」という史料に着目して吉原遊廓の実態とその近世的性格の終焉について論じた。この「吉原細見」を数多く収蔵しているのが愛知県西尾市にある岩瀬文庫である。本稿ではこの岩瀬文庫における史料調査内容と、得られた成果を論じると共に歴史学と国文学の先行研究をまとめ、「吉原細見」の研究における有効性も明らかにする。

本稿における近世吉原遊廓の定義は、1. 遊女が行う(性的であれ非性的であれ)サービスや遊女自身の身体は遊廓内においてのみその商品価値が保持されること。2. 遊女は遊廓内においてのみ存在性が保たれること(源氏名のみが「名」として成立する<sup>1)</sup>、の2点である<sup>2)</sup>。

## 1. 近世遊廓の研究史―その視角と課題―

近世遊廓をめぐる研究は、特に江戸の吉原遊廓を対象になされてきた。それは、近世において規模が最大級の遊廓であったことと、江戸文化の育まれた場所としての側面も多大にあったからである。吉原遊廓は、元和4(1618)年、現在の中央区日本橋人形町2・3丁目付近に庄司甚右衛門の求めによって設立され<sup>3)</sup>、明暦3(1657)年に幕命によって浅草日本堤に移転された。この移転以前の吉原を元吉原、移転後を新吉原という<sup>4)</sup>。吉原は江戸町1・2丁目、京町1・2丁目、角町、揚屋町、堺町、伏見町といった町々で構成されていた。出入口は基本的には大門と呼ばれる1ヶ所で、周りは通称お歯黒どぶ<sup>5)</sup>がめぐらされ、周囲とは一線を画していた。こういったことが要因としてか、遊廓は誰にとっても「公平な世界」を築いていたという言説がある<sup>6)</sup>。こういった「公平な遊廓」論は中野が「廓に関して非日常的な性格のみが往々にして強調されるくらいはあるが、建て前はどうか、実情はやはり日常と一つながりの場所であった。したがってそこでは当然のこと廓外の倫理がすべて通用するところであり、廓内のみの倫理などはありえない。身分階級においても然り。

(中略) 一步内へ這入れれば武士も町人も同列というのは、廓の建て前だけのこととせねばなるまい。」<sup>7</sup>と指摘するように、近世遊廓に対する研究においては一種の美化が見られる。お金があれば位の高い遊女と遊べた<sup>8</sup>という点で、庶民が大名より良い遊女と遊べた可能性はたしかにあった。ただし、遊廓そのものが公平性を有しており、入ればだれでも身分差が解消されたということはないのではないか。

また、近世の性そのものに「おおらかさ」、要は救いがあった<sup>9</sup>というイメージがされてきた<sup>10</sup>が、こういった「近代の売春より近世のそれは救いがあった」といういわゆる「江戸幻想」<sup>11</sup>はあらゆる立場から多くの反証がなされてきた<sup>12</sup>。しかし、未だに遊廓や遊女に聖性を認めるものもある<sup>13</sup>。こういった「近世遊廓・遊女美化」論を如何に打破していくのかが今後のジェンダー研究の課題の1つである。

吉原に絞った研究では、戦前期に太田百祥が名妓高尾に焦点を当てた研究を行い<sup>14</sup>、高尾に関する史料整理を果たす。また、市川伊三郎が吉原遊廓関係者自身が著した『新吉原遊廓略史』<sup>15</sup>は、著者の性格も珍しく、廓関係者から見た幕府、政府に対する感想が見て取れる。さらに、大正～昭和前期に行った三田村鴛魚の遊客の変遷の研究<sup>16</sup>は、現在においても遊客の動向を知るために重要なものである。また、近世の廓文化という特殊な土壌で育まれた独特の精神様態である「いき」、「意気地」といったものを論じたものもある<sup>17</sup>。戦後～60年代において、吉原の概略を示した石井良助の『吉原一江戸の遊廓の実態一』<sup>18</sup>は、半世紀を経た今日において色々な裏付けがされ始めた先駆的研究である。この中において、「徳川制度」を本格的に使用するなど、史料活用の面でも多大な功績を残した。同年代、台東区の著した『台東叢書 新吉原史考』<sup>19</sup>も、近世吉原遊廓を総覧したものととして挙げられる。しかし、これら以後、近世吉原を総覧したものはほとんどない。

70年代以降では、宮本由紀子が、「吉原細見」に着目し、「吉原細見」の研究が開始された<sup>20</sup><sup>21</sup>。この1970年代以降、近世買売春研究は大きく進展していく。塚田孝や吉田伸之が「町と身分」の視座を取り入れ、近世社会史を基礎とする新吉原研究を行い<sup>22</sup>、それを発展させた吉田による遊廓社会論<sup>23</sup>の登場は、遊廓研究を深化させていった<sup>24</sup>。横山百合子は、遊廓社会論に対して「ジェンダー視点の欠如という根本的問題点」があることを指摘した<sup>25</sup>。これを受けて、佐賀朝は、社会構造論とジェンダー研究の統合の必要性がある<sup>26</sup>ことを謳った。そしてこういった近世買売春の研究の進展とともに近世の「性」の捉え方も変化してきた。これが既述した近世買売春は近代よりもよかった、という言説との闘いである<sup>27</sup>。

近世遊廓の終焉については、横山や人見佐知子が、芸娼妓解放令を中心に近代公娼制度のはじまりについて論じている<sup>28</sup>が、近代公娼制度の開始は、自ら近世遊廓の終焉を示したものではないにもかかわらず、終焉について論じられることはない。唯一、宮本由紀子の「明治期の吉原一『吉原細見』の分析を通して一」<sup>29</sup>が、合印の廃止、揚げ代金の改正、娼妓の写真掲載、妓楼・茶屋の電話番号の記載が始まった明治35年を江戸期と近代の区分としている。しかし、「吉原細見」は明治期において度々変化しており、もう少し慎重に江戸期との区分、つまり近世吉原遊廓の終焉を論じることが可能である。本稿ではこれを岩瀬文庫における史料調査の結果から明らかにする。

## 2. 調査の概要と西尾市岩瀬文庫に就て

名古屋駅より約1時間電車に乗り、西尾駅から15分程度歩くと着く西尾市岩瀬文庫は、明治41(1908)年に西尾市の実業家である岩瀬弥助<sup>30</sup>が、本を通した社会貢献を志して創設した私立図書館として誕生した。戦後に西尾市の施設となり、平成15(2003)年4月に日本初の「古書の博物館」としてリニューアルし、平成19年12月7日に登録博物館となった。重要文化財を含む古典籍から近代の実用書まで、幅広い分野と時代の蔵書8万冊余りを保存・公開している。開館時間は、午前9時から午後5時まで(閲覧室は午後4時まで・申請は3時半まで)で、休館日は月曜日(月曜日が祝日の場合は開館)・館内整理日(7月から9月を除く毎月第3木曜日)・年末年始・特別整理期間となっている。<sup>31</sup>

調査は新型コロナウイルスの大流行によって緊急事態宣言が発令されていたため、卒業論文提出の1か月前に行き、11月16、17日の2日間岩瀬文庫で「吉原細見」を中心とした吉原遊廓関連史料の調査を行った。調査した史料と請求番号は以下である。「元吉原記」(函番号9-86)、「吉原町開基之事」(函番号102-195)、「新吉原火災の事」(函番号148-14)、「〈江戸町年寄三人・堺町木挽町三芝居・新吉原・長吏弾左衛門〉由緒書上書」(函番号5-59)、「新吉原細見」(1845年(函番号103-78)、1847年(函番号27-52)、1849年(函番号119-49)、1850年(函番号104-54)、1850年(函番号1-53-05ホ)、1851年(函番号8-16)、1851年(函番号1-53-04ニ)、1853年(函番号9-42)、1853年(函番号1-33)、1855年(函番号1-36)、1855年(函番号119-203)、1859年(函番号1-32)1860年(函番号1-37)、1861年(函番号119-212)、1862年(函番号119-208)1863年(函番号1-47)、1863年(函番号1-48)、1868年(函番号1-53-01イ)、1870年(函番号1-49)、1872年(函番号103-83)、1881年(函番号1-50)、1882年(函番号104-70)、1883年(函番号119-61)、1884年(函番号103-130)、1902年(函番号107-96))。

「吉原細見」の説明と調査結果は後述するので、ここでは「吉原細見」以外の史料調査から見えた結果を論じる。まず、注目すべきは「由緒書上書」である。これの「新吉原」の項では元吉原の開基からの事が書かれているが、この史料は一般的には「新吉原由緒書」として知られ、全国に写本が存在している。筆者も「新吉原根元覚書」という名の「新吉原由緒書」を所蔵しているが、岩瀬文庫所蔵のものの差出人欄を見ると、庄司甚右衛門之倅西田屋又左衛門(改行)西田屋又左衛門之倅又左衛門(改行)又左衛門之倅又左衛門(改行)又左衛門之倅当名主又左衛門。となっている。つまり、この「由緒書上書」の著者西田屋又左衛門は庄司甚右衛門の4代の孫ということになる。しかし、この「新吉原由緒書」を記した西田屋又左衛門は一般的には庄司甚右衛門の6代の孫とされており、2人の又左衛門がいないのである。筆者所蔵の「新吉原根元覚書」では5代孫となっているのでこちらも1人足りないのである。実は、庄司甚右衛門の6代孫というのはそうは伝えられてきているものの、それを示す史料は未だ存在しないのである。この点について『台東叢書 新吉原史考』は4代だとあまりに時代が離れているからおかしいという理由で、史料が存在しないことには留意しつつも6代が時代幅的に正しいとしている<sup>32</sup>。なお、西田屋とは遊女屋の名前である。

「新吉原火災の事」では、明暦の大火について触れているものの中で出火の場所を「本妙寺」

としており、吉原がかなり焼けたこともわかった。この明暦の大火と吉原の移転は特に関係がないのだが、2022年に出版された鈴木堅弘『「隠しアイテム」で読み解く春画入門』<sup>33</sup>では、明暦の大火で焼けたため移転という記述がなされている。しかし、その可能性は史料上ありえないことは指摘したい。

### 3. 幕末の吉原と「吉原細見」に就て

さて、史料調査の中心であった「吉原細見」について触れておかねばならない<sup>34</sup>。「吉原細見」とは、吉原の遊女屋と抱え遊女の名を載せた吉原遊び必携の手引書で、遊女の人別帳の役も担った。元々遊女評判記の巻末にあった「遊女名寄せの部」が「吉原細見」のもので、ここから独立を果たしたものである。<sup>35</sup>しかし、万治元(1658)年の「芳原細見之圖」のように、度々独立出版もされており、どこまでを遊女評判記、どこからが「吉原細見」といった統一見解は存在しない<sup>36</sup>。

「吉原細見」という語も天明2(1782)年から急に(新)吉原細見と呼ばれるようになったのである。<sup>37</sup>天明期以前にも度々「吉原細見」という語はあったものの、同年の序文の内題である「吉原細見」がそれ以降定着した。なぜこの内題が定着したのかは、不明である。「吉原細見」は、まず1枚摺りであった。これは、懐に入るレベルだが、広げると縦70～80センチメートル、横70～100センチメートルと大きく、見るのは不便であったと思われる。このあと享保期に横本(縦10センチメートル、横15センチメートル程度)の細見が誕生する。これは、町ごとにまとめられたために地図としての機能は失われたので、吉原にこれから通おうとする初心者には厳しい変化だったのではなかろうか。最後、安永期にたて本化し、これは地図の機能も果たし、これ以降型式変化は起こらないため完成形と言える。<sup>38</sup>また、「吉原細見」には合印とよばれる遊女自身の格式に応じた印が名前の上に記載された。同時に揚げ代金一覧表が記載され、吉原あそびにいくらかかるのかを知ることができた。つまり、「いくらかかるのか」気にする層の吉原通いが示唆される。

筆者の閲覧した「吉原細見」の中心は嘉永期以降(1848年以降)で、まさに幕末の「吉原細見」であった。幕末の吉原というのは遊女たちが放火し、苦痛な労働環境に抵抗を見せた時代でもあった<sup>39</sup>。その実情を示す事件が嘉永2年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件である。これは、その名の通り嘉永2年に梅本屋という遊女屋の抱え遊女であった遊女16名が梅本屋主人の非道に耐えかねて、付け火をした後自首した事件である。近年、横山百合子の研究によってこの事件の顛末がわかってきた<sup>40</sup>。しかし、『台東叢書 新吉原史考』によれば、「弘化2年(1845)8月、梅本屋佐吉抱え遊女福岡が残酷な折檻のために責め殺された。これに発奮した遊女16人は梅本屋に放火し、(中略)抱え主佐吉の非道と福岡を殺した罪を訴えた」<sup>41</sup>としており、横山の成果と最も異なるのは、福岡という遊女の扱いである。というのも、横山の成果では福岡は付け火を行った遊女の1人であるのに対し、台東区の方では、福岡は殺されているのである。

西尾市岩瀬文庫に所蔵されている「吉原細見」を確認すると、弘化2(1845)年のものにおいては、梅本屋という遊女屋は、角町6軒と呼ばれるところに存在している。京町には存在しない。嘉永2年の「吉原細見」では角町に存在せず、京町に存在している。これは横山のいうところと同じだが、1847年の「吉原細見」を確認すると、梅本屋は「吉原細見」に確認されないのである。つまり、『台

東叢書『新吉原史考』のいうように弘化2年に付け火が起こったとすると、1847年に梅本屋が存在しないのは説明がつく。また、『台東叢書 新吉原史考』は幕府の調書を引用して、弘化2年説としているからこの幕府の調書が何であるかを突き止めれば、この付け火一件の詳細がよりわかるが、台東区役所に問い合わせたところもうその調書が何であるか不明であった。そのため、その幕府調書の突き止めと、また、1846年の「吉原細見」は所在不明で調査できなかったが、今後の課題としたい。

さて、筆者は吉原町名主玉屋山三郎に注目し、その抱え遊女数と最高位の遊女の人数を数えた。それは以下となる<sup>42</sup>。83(呼新<sup>43</sup>10)、70(呼新9)、68(呼新9)、71(呼新11)、74(呼新11)、55(呼新8)<sup>44</sup>、61(呼新8)、61(呼新8)、57(呼新5)<sup>45</sup>、72(呼新6)<sup>46</sup>、65(呼新6)、66(呼新5)、58(呼新5)<sup>47</sup>、74(呼新4)<sup>48</sup>。これによって幕末まで呼出し新造付きが存在したことが確認された。本論からは外れるため詳細は省くが、筆者は近世吉原遊廓に存在した遊女の階級制<sup>49</sup>を時代順で太夫制、散茶最高位制、よびだし＝花魁制、と3段階に分け、これを近世遊女位制とした。つまり、幕末にいたるまで近世遊女位制は確保されていたことも確認された。簡単に述べると、太夫制は太夫が存在した宝暦12年までを言い、そこからは散茶が吉原の中で最高位の遊女となったので散茶最高位制とした。その後散茶は3種に分解されていき、その最高位をよびだしという。そしてこれが俗にいう花魁なのである<sup>50</sup>から、散茶最高位制の後の遊女位制をよびだし＝花魁制と名付けた。

よびだし新造付きは幕末まで存在することが確認された一方、その数を追うと、1849年時点で10人いたが、1851年秋の11人を最後に2桁に到達しないのである。慶応4年(1868)には4人となり、漸次的に減っていくことも注目される。遊女の総数は55～83とやや幅はあるが、最後には74人であるから減少の一途をたどっているわけでもない。つまり、最高位の遊女が相対的にではなく、絶対的に減っていることがわかる。玉屋山三郎は吉原町名主だが、その遊女屋でさえ最高位の遊女を確保するというのは難しくなっているということがわかる。

幕末の吉原は、遊女の放火が行われ、吉原町名主でさえ位の高い遊女を確保することが難しいという様相が「吉原細見」の分析によって明らかになった。

#### 4. 近世吉原遊廓の終焉一名を明かす遊女たち

明治3(1870)年の「吉原細見」<sup>51</sup>では、玉屋山三郎抱え遊女の中で、よびだし新造付きは3人、総数は68人。1872年の「吉原細見」<sup>52</sup>では、よびだし新造付きは0人となっており、総数は47人であった。70年から72年にかけての総数の大きな変化は、合印のない下層遊女が58人から34人に減少していることが影響と考えられる。また、この年から全て金での記載となった。芸娼妓解放令から5年間「吉原細見」の発行は止んだ<sup>53</sup>が、これが、芸娼妓解放令が理由なのか、1872年をもって細見株(発行権)をなくした<sup>54</sup>玉屋山三郎になんらかの要因があったのかは不明である。

明治14(1881)年<sup>55</sup>の「吉原細見」では、揚代金直段附合印が娼妓揚代金直段付合印という名称になり、「娼妓」が法律上の用語のみならず、社会に反映されたことがうかがえる。江戸町2丁目「ゑんつるよし」屋の抱え遊女6人が最小だったが、この年では角町清福屋、京町1丁目宝来屋がそれぞれ1人ずつで、江戸町2丁目でも亀甲屋、花屋が2人ずつといったように、抱え遊女数がわ

ずかな遊女屋が出現している。これらは、72年の「吉原細見」では見られない遊女屋である。なによりの変化は1872年まで14種の合印が、たった5種にまで減っていることである(最高位は入山形に▲)。これは、システムの簡略化を意味し吉原に多くの新規客を呼び込む対応策だったのではなかろうか。最も高い揚代は、87銭5厘で、どの合印にも娼妓の格が書いていない。つまり、1872年から81年の間によびだし＝花魁制は崩壊したのである。近世にあった遊女位制はここにて完全に終焉したと言える。

1882年の「吉原細見」<sup>56</sup>では、合印が8種類となり、最高位の遊女の合印が入山形に■に変わっていることが見て取れる(揚げ代金は1円)。そして、遊女屋主人名の横に番地が書かれ始め、加えて遊女の源氏名の横に遊女の名前が記載され始めたのである。名前を明かすということは、近世遊廓ではありえなかった。なぜならば、遊女に源氏名をつけることは脚註1でも記したが、「田舎の貧乏な家々から買い集めてきた卑賤の少女を、(中略)高雅で教養高き美貌の女性にデフォルメするための手だてであった」<sup>57</sup>からである。そして、名前を明かさないというのは、まさに遊廓内において源氏名によってその存在性が担保されていたからである。宮本はこの変化を自由意思で娼妓商売を行うのだから、法規的な身分上、誰にも所属しないので名前を名乗る必要があったとしている<sup>58</sup>が、なぜ名を名乗るのに10年という歳月を要したのかについて言及していない。

近世吉原遊廓において遊女は源氏名を名乗り、現世と離れた遊廓という空間を形成していたが、名前は廓外にも通ずるもので、遊女は遊廓内外を渡り歩く存在であることが、名前の記載によって単なる法制上ではなく、社会的に明示されたのである。そのため、この「吉原細見」がまさに近代吉原の出発点、つまり近世吉原遊廓の終焉と位置付けられる。よって、1882年が「吉原細見」上における吉原の近代化なのである。

## おわりに

吉原は売春を肯定し、それを制度化した幕府の施政方針を背景とし、末端に位置する遊女たちを搾取する構造があり、遊女たちは公娼として闘争していた。紙幅の関係で説明はしなかったが、芸娼妓解放令によって遊女はまさに自らの意思によってのみ性を売るという形式になった。しかし、実態的な解放にはならなかった。そのため、近世吉原遊廓としての性格から何ら変わることなく明治に突入した。そして、源氏名以外の、自らの名が「吉原細見」に記載される、つまり存在が遊廓内外に通じることとなり、近世吉原遊廓が有していた現世との隔絶性を社会的に絶たれたという大変革をもって、近世吉原遊廓は終わるのである。

「吉原細見」は当時の人々にとっては単なる遊女の人別帳的なものに過ぎないかもしれないが、その微かな変化から江戸吉原に遥かなる想像力ももたらしてくれる代物で、吉原研究にとってはかけがえのない史料であると言える。

今回、史料調査はコロナとの闘いもあってかなり時間的に厳しいものもあったが、西尾市岩瀬文庫には、様々な史料を用意していただき、大変感謝したい。「吉原細見」に多く触れることができたからこそ卒業論文は完成した。そして、その成果を2022年7月3日、総合女性史学会で発表することにもなった。様々な方々の支えでここまで来られたことに感謝し、これからも研究に邁進したい。

※西尾市岩瀬文庫(撮影者:筆者)



<sup>1</sup> この源氏名の持った有効性は、「源氏名は、『源氏物語』の影響の大きさを示すとともに、奥女中や遊女が源氏名を称することによって、生れの卑賤さを消し高級女性に変身することができたことに大きな意味があった。」(宮本由紀子「明治期の吉原—『吉原細見』の分析を通して—」『駒沢史学』34(駒沢大学歴史学研究室内駒沢史学会、1986))といったように、ある領域における自分の生成を果たしたといえる。

<sup>2</sup> 横山百合子「幕末維新期の社会と性売買の変容」(明治維新史学会編)『講座明治維新9 明治維新と女性』(有志舎、2015)において示された「近世後期性売買システムの特徴」を参考に定義づけた。

<sup>3</sup> 創立許可は前年に下っている(宮本由紀子「遊里の成立と大衆化」(竹内誠編)『日本の近世14 文化の大衆化』(中央公論社、1993))。

<sup>4</sup> 本稿では新吉原を取り扱うため、吉原といった場合は新吉原を指す。

<sup>5</sup> 遊女がお歯黒を捨てたため、その成分が黒色を呈したためといわれるが、元々の地勢が湿地帯のグライ土壌(排水不良な土壌)のため、それを反映した黒色土、あるいは、暗褐色土が溝の壁に表出していたと考えられる(小柳美樹「吉原遊廓地業についての基礎的研究」(『研究論集』第6号、2021)、24頁)。

<sup>6</sup> 「廓のあそびは、単にセックスの問題だけではなく、それはもちろん最大の比重を占めてはいたが、江戸時代という封建社会の枠の中に生きていた人間のあそびの場であったという点で、セックスをめぐる今一つの重要な要因があった。それは、封建社会の枠をはずして、現実から昇華した別世界にあそぶという、そのあそびをかなえる場として、廓は大きな役割を果たしたのである。(中略)公平に通用する世界(中略)を設定する必要があった。」(西山松

之助『西山松之助著作集第5巻 近世風俗と社会』(吉川弘文館、1985)、75頁)。

7 中野三敏「すい・つう・いき—その生成の過程—」(相良亨、尾藤正英、秋山虔編)『講座日本思想 第5巻』(東京大学出版会、1984)、139～140頁。

8 「支配階級として威張っていた武士も、吉原では、その政治的社会的権威の象徴ともいべき腰の物(大小刀)を、茶屋か遊女屋に預けさせられて、庶民と同じく丸腰にされたのみならず、田舎侍は浅黄裏として軽蔑されたのである。ここでは、金のある町人は武士を圧倒できたのである。」(石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)、i 頁)

9 「(前略)一部のフェミニストが、「近代批判」を遂行してゆくうち、あたかも「前近代」が女にとってより良かったかのような見方」(小谷野敦『江戸幻想批判—江戸の性愛』礼賛論を撃つ—』改訂新版(新曜社、2008)、11～12頁)がされ始めてきた。

10 例えば、関口すみ子『御一新とジェンダー—荻生徂徠から教育勅語まで—』(東京大学出版会、2005)がある。

11 「(前略)近世日本に関する妄想じみた思い込み(後略)」(小谷野敦前掲(2008)、7頁)。

12 小谷野敦前掲(2008)、長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』(校倉書房、2006)、中野栄三『遊女の生活増補 生活史叢書6』(雄山閣、1996)など。

13 佐伯順子『遊女の文化史—ハレの女たち—』(中央公論新社、1987)、「廓—江戸の聖空間—」『国文学 解釈と教材の研究』38—9(学灯社、1993)など。

14 太田百祥『古今史料 高尾考』(国史台、1895)。

15 市川伊三郎『新吉原遊廓略史』(新吉原三業組合取締事務所、1936)。

16 三田村鳶魚『江戸ばなし』(『三田村鳶魚全集11巻』(中央公論社、1975))。

17 九鬼周造『「いき」の構造』(岩波書店、1930)、中野三敏前掲(1984)。

18 石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)。

19 東京都台東区役所『台東叢書 新吉原史考』(東京都台東区役所、1960)。

20 これ以前に遊女評判記に関する研究は少ないながらもあった。たとえば、小野晋『近世初期遊女評判記集 研究篇』(古典文庫、1965)。

21 宮本由紀子『「吉原細見」の研究—元禄から寛政期まで—』『駒沢史学』24(駒沢大学歴史学研究室内駒沢史学会、1976)。

22 塚田孝『近世日本身分制の研究』(兵庫部落問題研究所、1987)、塚田孝「吉原—遊女をめぐる人びと—」(同編)『身分制社会と市民社会—近世日本の社会と法—』(柏書房、1992)、塚田孝・高埜利彦ほか『身分を問い直す シリーズ近世の身分的周縁6』(吉川弘文館、2000)、吉田伸之『近世都市社会の身分構造』(東京大学出版会、1998)。

23 新吉原五町遊女屋のへげモニーのもとで茶屋仲間をはじめ商人が従属的に従うという形の遊廓内結合と新吉原に近似する四宿・岡場所など江戸市中の疑似的な遊廓を総体として捉え、新吉原遊廓を中核とする江戸市中の性買売をめぐる社会的結合全体を「遊廓社会」として概念化した考え。(吉田伸之「遊廓社会」(塚田孝編『都市の周縁に生きる 身分的周縁と近世社会4』(吉川弘文館、2006)))

24 吉田伸之前掲(2006)。

25 横山百合子「芸娼妓解放令と遊女—新吉原『かしく一件』史料の紹介をかねて—」『東京大学日本史学研究室紀要 別冊 近世社会史論叢』(2013)、横山百合子「幕末維新期の社会と性買売の変容」(明治維新史学会編)『講座 明治維新9 明治維新と女性』(有志舎、2015)。

26 佐賀朝、吉田伸之編『シリーズ遊廓社会1 三都と地方都市』(吉川弘文館、2013)。

27 最新の研究では高木まどか『近世の遊廓と客—遊女評判記にみる作法と慣習—』(吉川弘文館、2021)において「近世美化論」に反証を示している。

28 横山百合子『江戸東京の明治維新』(岩波書店、2018)、横山百合子「遊女の終焉へ」(高埜利彦編)『近世史講義—女性の力を問いなおす—』(筑摩書房、2020)、人見佐知子『近代公娼制度の社会史的研究』(日本経済評論社、2015a)、人見佐知子「セクシュアリティの変容と明治維新—芸娼妓解放令の歴史的意義—」(明治維新史学会編)『講座 明治維新9 明治維新と女性』(有志舎、2015b)。

29 宮本由紀子前掲(1986)。

30 「慶応3(1867)年10月6日、須田町の肥料商、岩瀬弥蔵の長男として誕生。幼名は吉太郎です。吉太郎が20歳の時、突然、本家の猪代治が亡くなったので、本家の山本屋へ養子に入りました。さらに猪代治の長女れいと結婚、四代目弥助を名乗りました(明治20年・1887年)。明治30年代には西三河でも屈指の資産家になっていきました。明治31年、西尾町長に就任しましたが、わずか1年4か月余りで辞任し、その後は政治への関心をなくしました。一代で莫大な財を築く一方で、西尾鉄道を開通させたり、病院や学校の建設資金を寄附したりと、町づくりや地域の教育にも強い関心を寄せました。」(「岩瀬弥助と岩瀬文庫の歴史」

<https://iwasebunko.jp/about/history.html> 最終閲覧2022年6月19日)。

31 岩瀬文庫HPより( <https://iwasebunko.jp/> 最終閲覧2022年6月19日)。

32 東京都台東区役所前掲(1960)、40頁。

33 鈴木堅弘『「隠しアイテム」で読み解く春画入門』(集英社、2022)。

- <sup>34</sup> 「吉原細見」の概略説明は、宮本由紀子前掲(1976)に依拠した。
- <sup>35</sup> 宮本由紀子前掲(1976)、113頁。
- <sup>36</sup> 「遊女評判記」という分類・呼称は明治以降に用いられるもので、近世において遊女評判記という分類のものは存在しなかった(高木まどか前掲(2021)、95頁)。
- <sup>37</sup> 宮本由紀子前掲(1976)、119頁。
- <sup>38</sup> 宮本由紀子前掲(1976)、114～116頁。
- <sup>39</sup> 宮本由紀子「吉原仮宅についての一考察」(地方史研究協議会編)『都市の地方史—生活と文化—』(雄山閣、1980)に詳しい。
- <sup>40</sup> 横山百合子「梅本記—嘉永2年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介—」『国立歴史民俗博物館研究報告』200(国立歴史民俗博物館、2016)。
- <sup>41</sup> 東京都台東区役所前掲(1960)、186頁。
- <sup>42</sup> ()内の数字は最高位の遊女数で、その前が最高位の名前。()外の数字が遊女の総数。
- <sup>43</sup> よびだし新造付き。
- <sup>44</sup> ここまでが嘉永期(1848～1853)。ただし、史料は嘉永2年から。使用史料は順に「新吉原細見 嘉永2年秋」、「新吉原細見 嘉永3年春」、「新吉原細見 嘉永3年秋」、「新吉原細見 嘉永4年春」、「新吉原細見 嘉永4年秋」、「新吉原細見 嘉永6年春」(以上、嘉永4年秋本は筆者所蔵。他は全て西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>45</sup> ここまでが安政期(1854～1859)。ただし、史料は安政2年から。順に「新吉原細見 安政2年春」、「新吉原細見 安政2年秋」、「新吉原細見 安政6年」(春、秋部分が消えていたため不明)(以上、全て西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>46</sup> 「新吉原細見 万延元年」(西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>47</sup> ここまでが文久期(1861～1863)。順に「新吉原細見 文久元年」、「新吉原細見 文久2年」、「新吉原細見 文久3年」(以上、全て西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>48</sup> 「新吉原細見 慶応4年」(西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>49</sup> これを筆者は遊女位制と呼ぶ。
- <sup>50</sup> 花魁とはよびだしという吉原町を道中する権限を持った遊女であった。こういった遊女が本来の花魁であり、道中に同行した禿や新造らが、よびだしのことを「おいらが」、「おらが」ねえさんと呼んだことが「おいらん」称の始まりとされている。(石井良助前掲(1967)、128頁)
- <sup>51</sup> 「新吉原細見 明治3年春」(西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>52</sup> 「新吉原細見 明治5年」(西尾市岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>53</sup> 横山百合子前掲(2020)、234頁。
- <sup>54</sup> 「玉屋山三郎」  
(<https://kotobank.jp/word/%E7%8E%89%E5%B1%8B%E5%B1%B1%E4%B8%89%E9%83%8E-1090755> (『朝日日本歴史人物事典』(最終閲覧日2021年12月12日))。
- <sup>55</sup> 「新吉原細見 明治14年」(岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>56</sup> 新吉原細見 明治15年」(岩瀬文庫所蔵)。
- <sup>57</sup> 西山松之助「源氏名」(『国史大辞典』(<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz165670> (ジャパンナレッジ)最終閲覧日2021年12月12日))。
- <sup>58</sup> 宮本由紀子前掲(1986)、193頁。